

Title	二段活用の一段化時期
Author(s)	小林, 賢章
Citation	語文. 1991, 56, p. 39-44
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68828">https://hdl.handle.net/11094/68828</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 二段活用の一段化時期

小林賢章

室町時代から江戸時代にかけての最も大きな文法的変化の一つに二段活用動詞の一段化の現象がある。

ところが、この現象については現在までのところ、どういふ理由で、変化が起こったのかという一点を取り上げても、まだ確定をみていないのが、現状である。本稿では、二段活用の一段化が行われた時期を考えるのをその主目的とするのだが、あわせて、その理由についても、考える出発点としてみたい。

従来、二段活用動詞が一段化した時期については、島田勇雄<sup>(1)</sup>により、延享(一七四四—一七四八)ごろという主張がなされ、その後多くの人がこの意見に従い、定説となった感がある。江戸時代の中期には、二段活用動詞の一段化が完了していたというのである。しかし、この島田の論文を読み直してみると、島田の口調は、「その一段化が活発になったのは中世以後のこと、近世前期は二段活用の使われた最後の時期」とし、「更に前期と後期との境目にあたる享保—宝暦間には二段活用は口語からほとんど姿を消してしま

うとしていたものと思われる。」と慎重であり、延享という時代を必ずしも表には出していない。むしろ、広く「享保—宝暦間」という曖昧な表現によつていえるといえようか。

本稿では、表題のように二段活用動詞の一段化時期を、この島田の論文を出発点として考え直そうとするものであるが、(1)この現象が京阪に比べて、関東では先行して起こっていたこと、(2)下二段動詞に比べて、上二段動詞の一段化は先行して起こったこと、(3)語幹が一音節の動詞では、中世末には既に一段化が完了していたことなどは、この問題を考える前提となる事項であろうから、本稿で問題になるのは、京阪における下二段動詞の、しかも語幹が二音節以上の動詞の一段化時期の、それも完了した時期ということになる。

その主対象とするのは前記の動詞とその時期であるが、その出発点としては、島田の考えた江戸中期から、その対象も上下の二段動詞とし、語幹の音節数は問題としない。もちろん、上一段動詞と語幹の音節数が一つの動詞の使用頻度は下一段動詞と語幹の音節数が二つ以上の動詞のそれに比べると格段に少なく、考察の現場では事実下二段動詞がその主対象となるのは当然である。

島田の論が江戸中期を問題にしていたので、本稿でもその時代から考察を始める。「補註蒙求国字解」(安永七～一七七八)年刊)や「唐詩選国字解」(寛政三～一七九一)年序)などは、この一段化が行われた後の著作の代表であろう。そこで、その実体を「唐詩選国字解」により、見ておく。「付る」(10ウ5)・「過る」(11ウ9)・「尽る」(14ウ6)など、漢字表記のために、一段化しているかどうか判断が出来ない時は、これを除外し、判断出来るものだけを、巻一の冒頭から並べたものが、(表-I)<sup>(3)</sup>である。

〈表-I〉「唐詩選国字解」(巻1)より

×	カク	ル	(10オ10)
×	下サ	ル、	(11オ4)
×	下カ	ユル	(11ウ10)
×	見ユ	ル	(12オ8)
×	見聞	ユル	(12オ9)
×	ク	ク	(13ウ3)
×	ク	ク	(13ウ6)
×	隠	ル、	(14オ1)
×	見ユ	ル	(14オ3)
×	見ミ	ユル	(14ウ11)
×	ミ	ユル	(15オ3)
×	ミ	ユル	(15オ4)
×	ク	ク	(15オ4)
×	ク	ク	(15オ5)
×	ク	ク	(15オ6)
×	ク	ク	(15オ7)
×	見ユ	ル	(15オ8)
×	見ユ	ル	(15オ8)
×	見ユ	ル	(15ウ1)
×	見ユ	ル	(15ウ1)
×	ク	ク	( )
×			( )

〈以下略〉

もちろん、一般論としては、この表から一段化現象は起きていないと判断するのが妥当であろうが、一例見える「ミエル」から少なくとも、「見ゆ」に関しては、この作品中でも、一段化が起きていると言える点は指摘しておいてよいであろう。

「補註蒙求国字解」の巻一の冒頭部分の調査結果である。その結果を一言で言えば、「唐詩選国字解」と全く正反対の結果であると

〈表-II〉「補註蒙求国字解」(巻1)より

○	明ラ	メル	(4オ4)
○	タス	ケル	(4ウ11)
○	仕ヘ	ケル	(5オ5)
○	タス	ケル	(5オ11)
○	サセ	ル	(6ウ5)
○	アケ	ル	(6ウ7)
○	仕ツ	メル	(7オ8)
○	ウレ	フル	(7ウ3)
×	サク	ル	(7ウ7)
○	イマ	シメル	(7ウ8)
○	似セ	ル	(7ウ9)
○	ソタ	テル	(8オ2)
○	スエ	ル	(8ウ9)
○	ツフ	レル	(11オ3)
○	カタ	メル	(11オ11)
×	コユ	ル	(12オ6)
○	仕ヲ	セル	(12オ7)
○	ニケ	ル	(12オ8)
○	サ、	ヘル	(12ウ8)
×	ヘ	タツ	(13ウ6)
×	別	ル、	(13ウ6)
×	相	忘ル、	(13ウ9)
×	加	フル	(14ウ10)

〈以下略〉

言える。つまり、「補註蒙求国字解」では一段化が完了した結果を現し、「唐詩選国字解」では、一般論として、一段化が行われていないという結果が現れている。同時代の同種類の著作でありながら、結果には大きな差が生じる。

ところが、この結果を見て、この時代口語の世界で一段化が完了していなかった、少なくとも半分位は完了していないと言っ人はなからう。この問題に関して、「唐詩選国字解」はその実態を反映しておらず、「補註蒙求国字解」こそが実態を反映していると言っであろう。変化が起こる時、起きたものと起きていないものが文献の中に併存する時は、起きたと言っ事実こそ問題にするが起きていないと言っことは問題にしないと言っことをここで確認したい。そのことは、「唐詩選国字解」中の「ミエル」にも見えた。

それと共に、安永年間(一七七二～一七八一)より相当前にこの変化はおこっていたと予想してもよいのではないか。「補註蒙求国字解」の著者「田興甫」についてその事歴を明らかにすることはできない<sup>(4)</sup>。しかし、この安永年中に二十歳にも満たない若年だった

〈表-III〉「有べか、り」(巻上)

×	る	(2・2)
○	ふ	(2・3)
×	る	(2・4)
×	る、	(3・15)
×	る、	(4・6)
×	る、	(6・1)
○	る、	(8・16)
×	る、	(10・11)
×	る、	(10・12)
×	る、	(10・12)
○	る、	(11・7)
×	る、	(12・5)
×	る、	(12・8)
×	る、	(13・12)
×	る、	(14・5)
×	る、	(14・11)
×	る、	(14・11)

〈以下略〉

次に、心学道話も見直しておく。ここでも、二人の人物を扱ってみる。一人は手島堵庵であり、今一人は布施松翁である。それぞれ、「有べか、り」と「松翁道話」により調査を行う。ただ、ここで、断らなければならないことは、心学道話はほぼ全文振仮名がつけら

ては考えにくい。例えば、「唐詩選国字解」の著者服部南郭は天和三(一六八三)年に生まれ、宝曆九(一七五九)年に亡くなっている。「唐詩選国字解」の文章が南郭の口吻りを伝えるものとする、一般にそのひとの言語の基礎は十歳ころに固まるとされるから、南郭の十歳ころ元禄の末年の言語事情を反映することになるからである。

屋上屋を架す愚はこの当たりでやめ、今まで、こうした資料を扱う際、出版年次に引つ張られすぎたのではないかという疑問を提出して、次に進むことにする。

三

れており、前節で見たような漢字表記のために判断ができないケースはほとんどない点は付け加えておく。

ここでも、前節に見たのと同じように、堵庵には、一段化が起こらず、松翁にはそれが起こった、少なくともよりその傾向を強く示しているという対立的な結果が現れる。ところが、先にみたよりさらに厄介な問題がここにはある。これら二人はともに、京都の商家の出身であり、その出身地や身分においても全く差がない。ただ、手島堵庵は享保二(一七一八)年に生まれ、布施松翁は享保十(一七二五)年に生まれている。その生年の時期にわずかの差があるが、そのわずかの差が、これほどの結果の差になって現れるとは考えられない。ここでも、前節で述べたこと、この結果は、一段化現象が起きていることを示しており、さらに松翁の生年から考えると、享保の末年(一七三五)ころには、一段化の現象は起こっていたとも言えよう。

〈表-IV〉「松翁道話」(第一編)

○	はねる	(1・4)
×	ぼる、	(2・1)
×	ぼる、	(2・12)
×	ぶねる	(2・14)
○	ぶねる	(4・9)
○	もうける	(6・8)
×	うさる、	(8・14)
○	さかへる	(10・4)
○	かへる	(13・6)
○	かへる	(14・9)
○	せける	(15・5)
○	せける	(17・8)
○	せける	(18・14)
×	せける	(19・15)
×	せむれる	(21・1)
○	ける	(21・2)
○	ける	(21・7)
○	ける	(21・16)
○	める	(22・9)
○	める	(23・2)
○	る	(24・2)
○	ける	(27・2)
○	ける	(28・7)
×	らはる、	(29・1)
○	くれる	(31・2)
○	腹立てる	(31・5)

次に、近年古典文庫から一連の出版物として我々の簡単に目にすることができるようになった上方狂言本を見ておく。上方狂言本は今までに、全八冊が刊行されその収録部数は長短三十余部に及ぶが、そのうち卷二所収の「福寿丸」<sup>(7)</sup>「<sup>期あかづき</sup>明星茶屋」について二節の『唐詩選国字解』で行ったとおなじように、二段動詞の一段化の現

〈表-Ⅳ〉「軽口大わらひ」

○	つけ	(79下)
○	たづねる	(84上)
○	落ちる	(88上)
○	もうける	(89下)
○	おちる	(89下)
○	付ける	(98上)
○	はへる	(98上)
○	た、きあげる	(107上)
×	おつる	(107上)
×	うまる、	(108上)
×	仰らる、	(108上)
×	うまる、	(18上)
○	にげる	(111下)
△	被下る	(113上)
△	尋る	(114上)

〈表-Ⅴ〉「<sup>期あかづき</sup>明星茶屋」

○	聞へる	(143・5)
○	よせれ	(151・5)
○	くれる	(152・1)
△	出る	(155・5)
△	出れ	(155・8)
○	かくれる	(155・9)
△	付る	(156・1)
△	出る	(156・3)
△	出る	(156・11)
○	出る	(157・6)
○	ふせる	(157・6)
△	出る	(157・7)
×	あずくる	(158・10)

象を調べてみる。ただ、ここでは、漢字表記により、一段化したかどうか判断不明の用例も上げておく。全体の用例数が少なく、「補註蒙求国字解」などと同じようにしては、判断にいささか、誤差が生じるところからである。

漢字表記により判断不明の部分は確かに多く、一見一段化は進んで居ないように見えるが、「出る」——これに付いては、他本に「いずる」「いでの」の両表記が見られる——を除くと、平仮名書きで一段化したかどうか、確認できる動詞については、ほぼ一段化が完了しているといえよう。

〈表-Ⅵ〉「当世手打笑」

○	つけ	(124上)
○	折りかへる	(124下)
○	あける	(128上)
×	みだる	(132下)
○	尋る	(134下)
○	そげる	(134下)
○	やける	(146下)

〈表-Ⅶ〉「福寿丸」

×	かくる	(78・1)
○	くれる	(78・10)
○	はねる	(80・3)
○	とめれ	(80・3)
×	なさる、	(84・3)
△	立れ	(84・8)
○	うろたへる	(87・8)
△	立る	(92・4)
×	のくる	(94・6)
△	出る	(106・5)
△	出る	(111・1)
△	ねれ	(111・7)
○	ふせれ	(117・5)
×	かくる	(119・7)
△	尋る	(119・10)
○	ふせれ	(119・11)

## 五

さらに、時代を遡って、延宝時代に刊行された二つの笑話集「軽口大わらひ」(延宝八へ一六八〇年刊)、「当世手打笑」(延宝九へ一六八一一年刊)<sup>(8)</sup>を見ておく。

「軽口大わらひ」の用例のうち「おつる(107上)」については、

「おちる(89下)」の用例があり、「尋る(114上)」の用例については、「当世手打笑」の「尋る(134下)」の用例により、一段化していたことが確認できるから、以上二つの笑話集中の用例からは、一段化が完了しているといえるのではないか。

ただ、前の節でみた「福寿丸」<sup>【卯あかつき】</sup>「明星茶屋」でも、本節で見た「軽口大わらひ」<sup>【卯あかつき】</sup>「当世手打笑」でも、当該の本を除くとその類書では、つまり、「福寿丸」<sup>【卯あかつき】</sup>「明星茶屋」の場合、三十余部の上方狂言本類、「軽口大わらひ」<sup>【卯あかつき】</sup>「当世手打笑」の場合、当該年ころに出版された断本では、この現象が見られないことは述べて置かなければなるまい。しかも、その比率は限り無く零パーセントに近しい数値であることを。しかし、こうした現象は同時平行的に記録に残るわけではないこと前節までに、述べてきた。むしろ一つでも、その結果を示すものがあればそうした変化は起こっていたと考えてよいわけである。とすれば、詳しく身分などの位相差をここでは考えないが、というより考えられないが、ともかく、一般論として延宝八、九へ一六八〇、一〇年には、二段動詞の一段化はほぼ完了していたとしてよいのではないか。

さらに、今まで述べてきたように、書く人の年齢を考慮にいれると、二段動詞の一段化時期は、さらに時代は遡るであろう。中世から近世にかけての変化であったとより強く言えるのではなからうか。

## 六

江戸中期から出発して、時代を遡る形で、二段活用 of 一段化の現象を考えてきた。つまり、中世末には、語幹が一音節の動詞の一段

化現象は起こっていたが、延宝末年ころには、上方でも、この変化が、語幹が二音節の動詞でもおきており、ほぼ、完了していたのではないか。そう考える時、動詞に比べてその変化が遅いとされるが、元禄時代にはその一段化の現象の見られる助動詞の「る・らる」の一段化現象も無理なく説明できると思われる。

さて、まず語幹が一音節の動詞でおこり、次に語幹が二音節の動詞、さらに、助動詞へもその変化をひろげていった、いわゆる二段活用 of 一段化の現象のよって来るべき理由はなんであろうか。

従来、助動詞の一段化現象が動詞のそれに遅れるのは、動詞においても多音節の動詞の一段化は遅くなる傾向があるが、助動詞が動詞の一部と認識されたためこの傾向のなかに位置したというものであった。しかし、本調査でも明らかのように、語幹の音節数の多寡により、一音節と二音節以上の動詞との差程にはつきりと、その一段化に遅速があるとは認められない。

とすれば、助動詞の一段化現象は動詞のそれに引つ張られた結果であるといえよう。では、動詞の内部でなぜ語幹が一音節の動詞と二音節以上の動詞に一段化において、遅速の差が出たのであろうか。動詞の表記とその背後の意識についてはかつて述べたことがある<sup>(10)</sup>。そこでも少しふれたことだが、やはり、一段化の現象は、意味の留保の問題に起因するのではなからうか。

活用の知識のなかつた時代においては、動詞を体言形と用言形の二つの形で理解していた。それは、今日風というなら、連用形と終止形である。平安時代から鎌倉時代にかけて、広く起きた、連体形が終止形にとってかわる現象は、こうした意識の安定を大きく揺るがしたはずである。従来の終止形の語形の安定が崩れ、それが、ま

ず、意味の留保がより難しい語幹が単音節の動詞で起こり、さらに語幹が二音節以上の動詞にも拡大していったというものである。

## 七

本稿の用例だけでは、一段化時期を、延宝ころと確定することは難しいことを承知のうえであえて、事実を並べてみた。少なくとも、延享ころに一段化が完了したというような安全な意見には一石を投じたと思う。

上方狂言本と並んで、元禄ころの語学資料としてよく使用される浄瑠璃本について、その文語性が強い点も指摘しておいてよからう。菅原智洞といった人物を観察する時、この浄瑠璃の詞や意識の世界は、動化物の世界と類似していることがわかる。そのことからそのことは言える。浄瑠璃を、例え、それが世話物であっても当時の口語世界をそのまま反映しているとは言にくいのである。

さらに、一段化の背景について、詳しく述べねばならないという次の問題を残して、本稿を終わりたい。

## 注

- (1) 島田勇雄「近世後期の上方語」(『国語と国文学』36巻一号)
- (2) (一) 内の数と記号は、用例所在場所を示す。順に丁数とその表裏、二行制注となつてゐるが、その二行を一行と数えた行数を示した。
- (3) 表中の○×は一段化がおきてゐるか、どうかに対応しており、一段化しているか判断できるものには○を、できないものには×を付した。
- (4) 「補註兼求国字解」が大正二年「訂漢文叢書」の一冊として刊行された際、久保天随はその解説の中で、「著者の伝記に至りては、浅学未だ之を考ひ得ず、敢て大方の指教を俟つと云爾。」と述べてゐる。

(5) 『心道話全集』第四卷(昭和三年忠誠堂刊)による。(一)内はその頁数と行数を示す。

(6) 『心道話全集』第二卷による。(一)内は、同じくその頁数と行数を示す。

(7) 柿田善雄・鳥越文蔵編「上方狂言本 二」(古典文庫第一八七冊 昭和38年刊)

(8) 武藤禎夫・岡雅彦編「断本大系 第五卷」(昭和50年 東京堂出版刊)

(9) 松村明編「古典語助動詞詳説」(昭和44年 学燈社刊)の「れる・られる—受身(現代語)」「執筆者 土屋信一」に、

「近代前期の資料には次のような例が散見する。  
金が見えねば一番に疑はれるは俺やそなたぢや。(傾城江戸桜・元禄11)  
耳に入れば。夜明けまで括られる。(心中天の網島、下・享保5)」  
とある。

(10) 拙稿「動詞表記の二類型」(『青須我波良』第14・15号)

—同志社女子大学助教—